

玉山金山跡地周辺図

順路に沿って

行ってみよう!!

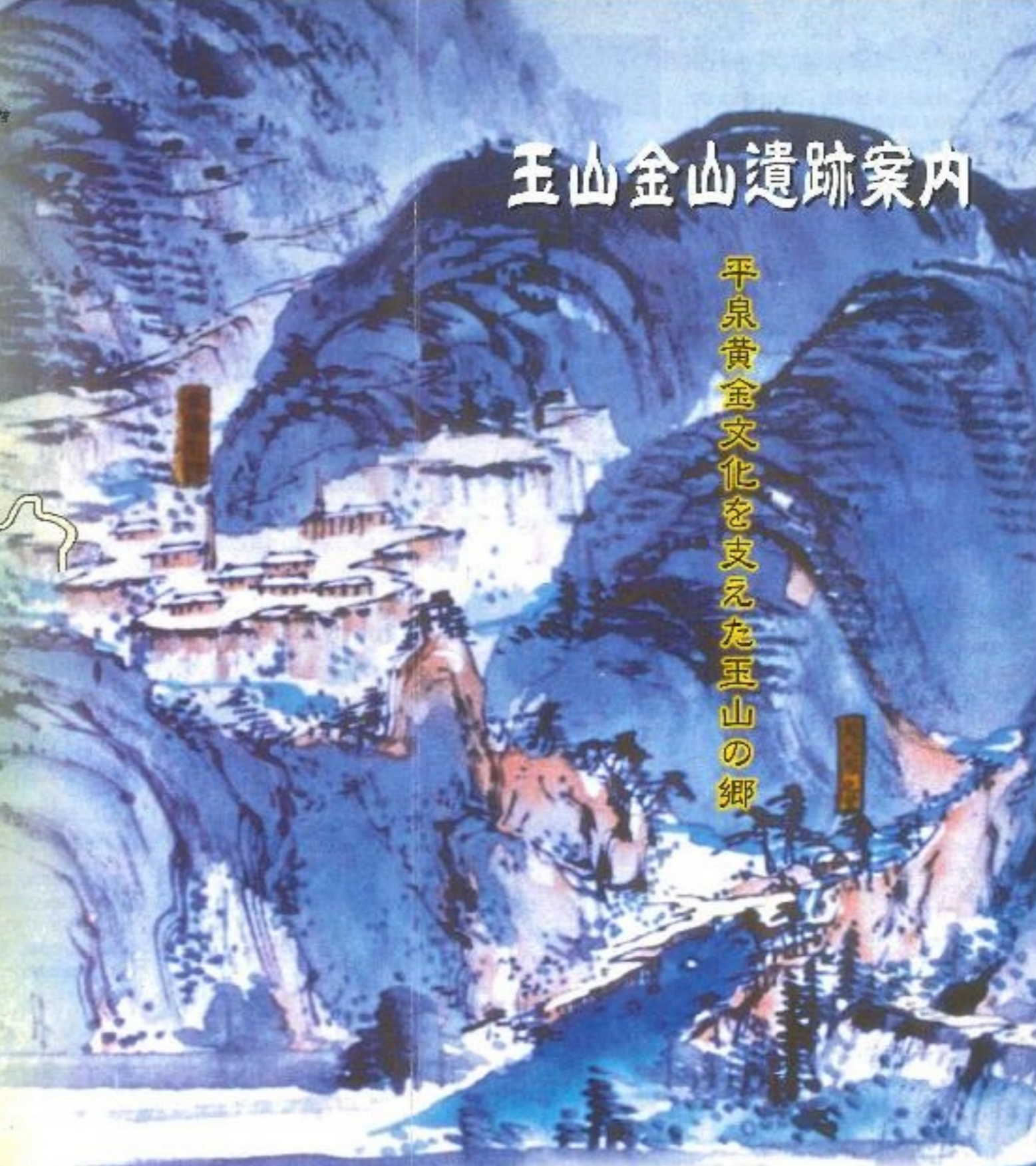


玉山金山遺跡等保護エリア



玉山金山遺跡案内

平泉黄金文化を支えた玉山の郷



玉山金山遺跡活用推進協議会編

出典：玉山金山遺跡活用推進協議会

たまやまのなまい
玉山の地名

「玉山、黄金多出たる山なり。又水鳥を出す故に玉山と号けり」(寛仙洞土草)と記されているように古くからこの山を玉山と呼んでいます。



せかいだいせきとよやまのいりきょうた
世界大遺跡玉山霊域塔

昭和7年(1932)竹駒社の有志で高さ11メートルの塔を建立するが、昭和19年(1944)太平洋戦争による敵機の攻撃目標にされるのではと、撤去されました。平成4年、サンタ・マリア号の大航海渡来航を記念して高さ15メートルの塔を再建しました。



【案内板の内容】

玉山金山は、天平年間(729~49)福行基によって発見されたとの伝えや、天平神宇4年(752)、奈良東大寺大仏の建立や平家の源氏清盛にも資金を献上したこと。平里盛が宋国の高麗王へ黄金千三百両を献上したこと。マルコ・ポーロの「東方見聞録」に記されたコロンブスの新大陸発見は、大航海時代を象徴する確拠となったことなどが記されています。



たけうまのじんじや
竹駒神社

竹駒神社は、天平年間(729~49)に山城国(京都府)の伏見大社より金山守靈神として分霊された神社と伝えられています。天明7年(1767)旧地から現在地の金子長村に神座されました。



しんてんかいはつたのまつかき
新田開発と松坂堰

玉山金山に資源の兆しが見え始めたころ、松坂十兵衛は鉱夫たちを勧誘して、約百畧7町9反24歩(約7.8ヘクタール)の土地を墾墾して、鉱夫たちに生活の糧を博せざることにしました。

墾墾時には、田五町四反八部二十二歩(約5.5ヘクタール)、畑二町三反二部二歩(約2.3ヘクタール)とあり、開墾は寛文3年(1663)に始まり、同6年に終わったとされています。

また、開墾された水田には、堤延長約1キロメートルの用水堰を通し、幸の沢川の水を引き入れました。この堰を松坂堰と呼んでいます。工事には行灯割屋が用いられたり、堰の崩落を防ぐため石垣を築き粘土をつめるなど、工事は困難を極めたと言われています。



どうもほろこしのかいり
行基菩薩腰掛岩

福行基(668~749)は和歌山(大和府)の人で、わが国で最初の大権正になりました。行基が諸國巡視の折、この地に到着して休息をした時に腰を掛けた岩と伝えられています。



おいてまげじんじや
大天婆神社



この神社は玉山金山麓のこのころの天平年間(1573~582)に勧請され、修築(金)が記されています。また、御治神とも言われ、登山で働く鉱夫達の階級具を作った御治神が、信奉していた神と伝えられています。

けんもんじや
検問所跡

玉山金山の入口にあつて、全1階級の多くの人々が出入りした検問所の跡と伝えられています。ここより奥を「方八町」と称していました。



せいれんじんじや
精錬所跡

鉱石を鉄槌で砕き石臼でひいて粉砕し、それをゆき分けて、床屋といわれる精錬場には置かれていました。この場所が精錬場・精錬所と言われていました。



まくりや
博打岩

博打岩と呼ばれた巨岩の下に、ポツカリと穴があいています。ここで鉱夫達が、博打をしていたことからこの名がつけられました。



しんじや
荘巖寺跡



福徳院(松坂村)の住持一舟上人が玉山に登山し、御金山下代松坂右衛門宗久とともに寛長元年(1596)一寺を創設し、山麓に新寺と号しました。その後、玉山金山の資源とともに鉱夫達の人口増加によって、現在地の仲の沢に移転しました。

おんごんざんかしろまつかき
御金山下代松坂屋敷跡

松坂右衛門宗久は伊勢(三河)松坂の人でしたが、文禄2年(1593)御前郡竹駒村の玉山に آمدました。寛長3年(1596)、伊達政宗から御金山下代に任じられました。ここがその松坂氏が代々住んでいた屋敷跡と伝えられています。



入山許可申請が必要となります。
千人坑跡

一定の条件で免除されます。

玉山金山麓高岡の古跡と言われており、玉山神社の真下を掘り除根に多くの坑跡が掘られています。往時は「三千坑」と呼ばれた坑もあつたと伝えられますが、延享元年(1673)ころから次第に黄金量が減り、今は坑跡に往昔を偲ぶだけとなっています。



入山許可申請が必要となります。
和右衛門坑跡

寛長18年(1611)、矢作村当沢の金山部が御前源太尉がはじめてこの坑を開いたと伝えられています。その後、文政4年(1821)瀬戸和右衛門が再び開いたとされたので、以来和右衛門坑と呼ばれるようになりました。



入山許可申請が必要となります。
玉山神社(玉御前様)

一定の条件で免除されます。

この神社は、天平年間(729~49)竹駒神社と同じく金山守靈神として祀られたと伝えられています。祭神は市村止宗命(并財天)です。その後、平泉源三郎や仙台藩の藩主にも深く信仰され、政宗公は文政4年(1821)に、頼村公は寛文10年(1670)に社殿を再建、更に不仕院八世の光政が宝暦9年(1759)に再興しましたが、野火のため焼失しました。なお、現在の社殿は古跡りで大正年間の建立と言われています。



入山許可申請の詳細は右のQRコードから



— 霊泉玉の湯の由来 —

玉の湯は江戸時代末期(今からおよそ140年前)第9代御金山下代松坂屋敷によって開かれたものです。

当時、石炭産地だった湯谷松坂右衛門が御金山で玉山金山を訪れた時、松坂屋敷に対して住居金山の温泉が大変効果があるという話をしました。松坂屋敷は早速鉱夫だった己代治と共に千人坑跡から鉱水を引き、それを飲み、さらにその鉱水を沸かした湯に入ってみたところ、大変体の調子がよく、そのときの喜びを次のように伝えています。「心身 驚く 寒やかにして 頗る 楽哉(病氣をいはず) 幸甚也」と。これが玉の湯の発祥でありました。

松坂屋敷はその後20年間治療のための湯場を設け、無料で湯治客に奉仕したところ、近頃近郷に伝わり、特に春・秋などには1日100人にも及ぶ湯治客で賑わつたと伝えられています。

(湯谷松坂屋敷 跡前高田市地も考より)

出典：玉山金山遺跡活用推進協議会